▼最優秀賞受賞作品（ジュニア部門　作文・童話等）

碧空（へきくう）～平和への願い～

南　征史朗

「鈴鹿市は戦争のためにつくられた町、『軍都』だった。」

私はこのことをきいて、驚いた。また、それ以上に疑問を隠すことができなかった。

私が住んでいる鈴鹿市には到底、戦争があったのか疑うほど平和なのだ。私は、そのことを初め、理解できなかった。

そこで私は、「鈴鹿海軍航空隊」という、海軍飛行兵の教育施設の跡地を訪れた。そこにはまるで、戦争があったということを語るように正門と番兵塔が建っていた。また、隣にあった「碧空」の碑。これは戦友会が建てたもので、これからの平和と、戦死していった仲間たちの安泰を願っているようにも思えた。

空には碧空（アオゾラ）が永遠につづいていた。

一九三一年、満州事変がおきた。それから日本は大陸侵略を進めていた。もちろん、土地が増えるということはほかの国からの防衛をしないといけない。そこで計画されたのが「第三次海軍備補充計画」。これは、軍艦の建造と航空兵力の増強を目的としたものであった。そこに「鈴鹿海軍航空隊」の開隊が含まれていた。

開隊するにあたり、民家や畑はすべて軍が買収した。当時、軍には逆らえなかった。当時、軍は多大なる影響力を持っていた。そんな社会に私はなってほしくない。

そもそも「鈴鹿海軍航空隊」とは何かと疑問を持つ人が多いと思うのでここで概要をかこう。

鈴鹿海軍航空隊は一九三八年十月一日、白子町にできた施設であった。面積は三八〇万㎡（東京ドーム八一個分）で想像を絶するほどの大きさであった。当時、戦闘機のパイロットになるには霞ヶ浦海軍航空機などへ入隊したのちに、操縦士は筑波海軍航空隊などへ、偵察飛行兵はこの鈴鹿海軍航空隊で教育を受けた。つまりは偵察飛行兵を育てる学校なのである。

ここで多くの人が疑問を持つであろう「偵察飛行兵」について解説していく。偵察飛行兵とは戦闘機の後ろに乗る飛行兵で操縦士に飛行スピード、角度、方向などを即座に計算して伝えたり、※機銃を使って打ちおとしたりもしていた。

この鈴鹿海軍航空隊では約6ヶ月～9ヶ月間をかけて勉強をしていた。前半は教室での講義、後半では実際に飛行機にのって訓練をしていた。やはり事故もあり龍光寺の近くなどのところにも墜落した。

一九四五年。日本が連合国の攻撃に押され、空襲も激しくなってきた。そして、鈴鹿海軍航空隊も偵察飛行兵を教育することをやめた。敵国と直接戦う特攻基地に変わったのである。

みなさんは、特攻隊、特別攻撃隊をご存知だろうか。これは片道だけの燃料を積み、敵の軍艦に直接体当たりをする攻撃方法を用いる部隊である。この攻撃方

※戦闘機についている銃

法は、自分の命と引きかえにする非人間的な攻撃方法である。

そんな部隊を鈴鹿海軍航空隊はつくってしまったのである。その部隊の名を「若菊隊」という。この組織の人員はすべて若い人であり、多くの未来ある若者の命をこの地から旅立たせてしまった。すべての特攻隊を合わせた死者数は約四〇〇〇人であった。

一九四五年八月十五日、終戦をむかえた。

今、そんな非人間的な戦争の風化がおこってきている。その例として、いつまでも当時を語る戦争遺跡が壊されているというのである。

最も鈴鹿で有名なのが鈴鹿海軍航空隊第三～五格納庫の解体である。ＮＴＴが所有し、大切に保存されていたのだがＮＴＴの撤退にともなって解体された。この完全な状態での格納庫は全国でもここしかなく貴重なものであった。

今も、戦争遺跡の破壊は進んでいる。これは鈴鹿市だけの問題ではない。全国の問題である。保存するためには行政の協力が必要になるのだが行政は、「年代が浅い」、「文化財的価値が低い」などの理由で文化財としても見ていない。

鈴鹿市には「鈴鹿海軍航空隊」、「第二鈴鹿海軍航空基地」、「三菱重工業」、「第二海軍航空廠」、「鈴鹿海軍工廠」、「北伊勢陸軍飛行場」、「鈴鹿陸軍飛行場」、「第一気象連隊」、「陸軍第一航空軍教育隊」、「亀山陸軍病院」など大量に戦時中の部隊、工場があった。

しかし、国の登録有形文化財に登録されているのは、北伊勢陸軍飛行場掩体の一つである。そして、これも登録文化財という壊れても行政はなにもしてくれない文化財なのである。

今、戦争遺跡の破壊だけではなく崩壊も進んでいる。それを改善するためには、行政の協力が必要不可欠である。早急に文化財指定が必要である。

その特に文化財指定が必要なものを紹介する。それが前述した「北伊勢陸軍飛行場掩体」である。これは現在老朽化により雨漏りが発生していていつ崩れるかもわからないレベルになっている。三重県で唯一の掩体壕（コンクリート製）を守るためにも早急な行政措置が必要である。

ほかには、石薬師にある陸軍石薬師射撃場である。ほぼ完全体でのこる射撃場は非常に貴重である。

未だに、戦争遺跡の重要さがわかってない人に私は伝えたい。今はちょうど祖父母などから戦争体験を聞いて、近く感じている人も多いだろう。その感覚で破壊してしまうと、これから百年後、二百年後に本でしかみたことがない人だけになると、実物があるかないかでは大きな平和への理解度の差が生まれるのだ。

今、私達は平和な世界で生きている。しかし、その平和は特攻隊で戦死していった人達も願っていたかもしれない。

この碧空（アオゾラ）へ飛んでいき、二度と戻ってこれなかった人々がいることを知ってほしい。

〈参考文献〉
・鈴鹿市の戦争遺跡～鈴鹿市の軍施設の全容～　浅尾 悟　著